

## 色

日本語の色彩語彙には三つのグループがある。まず「赤・黒・青・白」は基本的な色彩語で、「赤い・黒い・青い・白い」と形容詞として用いられる。「茶色・黄色」も「茶色い・黄色い」と活用の形を持つが、もともとは「茶の色」「黄の色」と他のものの色合いを借用して造った語だ。

日本語には古来、色彩を表す語がなかったと言われ、そのため他のものを借りて色を表す方式をとった。「緑・紫」は植物からで、「緑色・紫色」と「色」を付けても用いられる。もちろん「緑色い」のような活用の形を造るわけにはゆかない。以下、「桃色・蜜柑色・灰色・狐色・鼠色・金色・銀色」など植物や動物・鉱物を利用した色彩名詞を数多く生み出した。さらに近年、外来語の「ピンク・オレンジ・グレー・グリーン・ブルー・シルバー」など、さまざまな色彩語彙が使用されるようになった。

先に述べたように古来、日本語は「赤い・黒い・青い・白い」の四語を基本としていたため、深紅も紅や朱色も、また、えんじも、茶色も、等しく赤の範囲で表された。「赤土・赤金(銅)・赤煉瓦・赤い靴・赤味噌」など茶色の物も「赤」で一括され、同様に藍色も紺も紫も緑も「青」の範囲に含まれることから、緑色の「青葉・青梅・青物市場・青筋・青々と」なども「青」で表現される。「赤い靴」と言ったとき、真っ赤な靴か茶色の靴かわからない。また、同じ「青々と」でも「青々とした海原」と「青々とした草原」とでは、表す色が異なるわけである。

色彩語には「真っ赤」「真っ白」のように「ま～」を付けて真に赤い、完全に白いの意を表す語もあるが、これも「赤・黒・青・白・茶色・黄色」あたりまでである。また、「黒い・白い」では「真っ黒い／真っ黒だ」「真っ白い／真っ白だ」の二種類の形を持つが、「赤」と「青」には「～だ」の形しかない。これら二語は「まっかだ」「まっさおだ」と発音も変化する。色彩語にはそのほか「深緑」「薄茶色」「浅黄」「濃紫」「どす黒い」など、接頭辞を伴う語もある。

